

令和 8 年度

一般選抜前期日程入学試験問題

## 総合問題

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（16 ページ）には、解答用紙 3 枚と下書き用紙 2 枚が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出し、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答はすべて、解答用紙に横書きで記入しなさい。間違っても下書き用紙に記入しても、回収しません。
- 5 句読点は、一字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

## 問 題

課題文①・②・③を読んで、次の問いに答えなさい。

- 問1 課題文①において、能力主義社会にはどのような長所があると述べられているか。貴族社会と対比させながら 100 字以内で説明しなさい。
- 問2 課題文①下線部(ア)「反対の見方」とはどのような見方か、180 字以内で説明しなさい。
- 問3 課題文①下線部(イ)「哲学者は一般的な意見を特徴づける道徳的直観と対立する」とはどういうことか、120 字以内で説明しなさい。
- 問4 課題文②下線部(ウ)に「ヨーロッパでは不平等度が高まると人々は幸福感を感じなくなるのに対して、アメリカ人は不平等度が高まっても幸福感が影響を受けない」とあるが、それはなぜだと述べられているか、100 字以内でまとめなさい。
- 問5 課題文②下線部(エ)「所得階層間の移動可能性」とほぼ同じ意味の 6 文字の言葉を課題文①から抜き出しなさい。
- 問6 課題文③における筆者の主張を 100 字以内でまとめなさい。
- 問7 課題文①・②・③を踏まえ、あなたは「不平等」とはどういうことだと考えるか、また、その不平等に対してどのように対応できると考えるか、400 字以内で述べなさい。

## 課題文①

二つの社会を考えてみよう。ともに不平等な社会であり、その程度も同等だ。一つは、国民所得 100 ドルごとに、最も裕福な 20% の人びとが 62 ドルを受け取るいっぽう、最も貧しい 20% の人びとは 1 ドル 70 セントしかもらえない社会。もう一つは、下位半分の全所得をまとめても 12 ドル 50 セントにしかならず、最も裕福な 1 % の人びとが手にする金額 (20 ドル 20 セント) にも遠く及ばない社会。資産の格差はさらに大きい。

あなたが所得や資産の著しい不平等に苦しんでいれば、これら二つの社会は正義にもとると考えてもおかしくない。しかし、そう判断する前に、あなたはさらなる情報を求めるかもしれない。たとえば、こうした不平等な配分がいかにして生じたのかを知りたいと思うかもしれない。

そこで、一つ目の社会は貴族社会であると想像してみよう。所得と資産は生まれによって偶然に決まり、一つの世代から次の世代へと受け継がれる。貴族に生まれた者は裕福で、農民に生まれた者は貧しい。同じことが両者の子供にも、子供の子供にも当てはまる。次に、二つ目の社会は能力主義社会であると想像してみよう。この社会における所得と資産の不平等は、世襲特権ではなく、人びとが才能と努力によって獲得したものの帰結である。

これを知れば、あなたはおそらく一つ目の社会よりも二つ目の社会のほうが好ましいと思うだろう。貴族社会が正義にもとるのは、人びとを生まれた階級に閉じ込めるからだ。この社会は人びとに出世を許さない。対照的に、能力主義社会では、人びとは才能と創意を発揮することで自分の置かれた境遇を改善できる。これは、能力主義社会に味方する強力な議論だ。確かに、能力主義によって不平等が解消されることはない。人びとの才能や願望はさまざまであり、一部の人びとはほかの人びとよりも出世するからだ。だが少なくとも、こうした不平等は、人びとの生まれよりも能力や功績を反映したものとは言える。

不平等について懸念する人びとは、さらにいっそうの情報を要求するかもしれない。彼らはこんな疑いを抱くはずだ。能力主義社会においてさえ、社会の頂点を占める人びとの少なくとも一部は、人生を有利なスタート地点から始めた恩恵に浴しているのではないかと。有利なスタート地点とは、愛情に満ち、支援を惜しまず、おそらくは裕福な家庭、献身的な教師のいる優秀な学校といったもの

だ。こうした疑り深い人びとは、能力主義社会は正義にかなうと宣言する前に、次の点を知りたがるだろう。すなわち、家庭環境にかかわらずすべての子供が、持てる可能性を十分に発揮するための教育的・文化的機会を手に行ける政策がとられているか、と。

正義にかなう社会を生み出すものについて考える一つの方法は、自分が裕福な家庭で育つか貧しい家庭で育つかがわからないとき、どんな社会を選ぶかを問うことだ。この基準に従えば、貴族社会よりも、真に平等な機会のある能力主義社会のほうが正義にかなうということに、ほとんどの人が同意するだろう。だが、正義の問題はひとまず置いて、われわれが想像している不平等な二つの社会のもう一つの特徴について考えてみよう。自分が社会の頂点に立つか、底辺に沈むかが前もってわかっていると。自分が金持ちだとしたら、二つの社会のうちどちらで暮らしたいだろうか？ また、自分が貧しい場合はどうだろうか？

どちらの社会もきわめて不平等であることを思い出してほしい。上位1%に入れば、平均所得は年間130万ドルに達する（と想像してみよう）。いっぽう、下位20%に低迷すれば、年間5400ドルにすぎない。これは相当な違いだ。裕福な者と貧しい者の格差はどちらの社会でも同じくらいひどいのだから、自分がどの位置を占めるかがわかっても、どちらの社会を選ぶかを決める助けにはならないと、あなたは結論するかもしれない。

しかし、考慮すべき事柄は所得や資産だけではないはずだ。あなたが金持ちなら、自分の資産や特権を子供に引き継げる社会を選ぶかもしれない。これは貴族社会を支持する論拠だろう。あなたが貧しければ、自分や子供に出世のチャンスがある社会を選ぶだろう。これは能力主義社会に賛成する議論だ。

ところが、さらに熟慮してみると、それぞれのケースで反対の見方があることに気づく。人は、自分がどれだけ金持ちかに関心があるだけではない。裕福さや貧しさが自分の社会的地位や自尊心にどんな意味を持つかも気にしている。あなたが貴族社会の上位層に生まれていれば、自分の特権は幸運のおかげであり、自分自身の手柄ではないとわかるだろう。いっぽう、努力と才能によって能力主義社会の頂点に登り詰めたとすれば、自分の成功は受け継いだものではなく、自ら勝ち取ったものだという事実を誇りにできる。貴族社会における特権とは異なり、能力主義社会における成功は、自力で地位を手にしたという達成感をもたらす。こうした観点からすると、貴族社会よりも能力主義社会において裕福である

ほうが好ましい。

同様の理由で、能力主義社会において貧しいことは自信喪失につながる。封建社会で農奴の身分に生まれれば、生活は厳しいだろう。だが、従属的地位にあるのは自分の責任だと考えて苦しむこともないはずだ。また、自分が苦役に耐えながら仕えている地主は、自分より有能で才覚があるおかげでその地位を手に入れたなどと思い込んで悩む必要もない。地主は自分よりもその地位にふさわしいわけではなく、運がいいにすぎないことがわかっているはずだからだ。

対照的に、能力主義社会の最下層に落ち込めば、どうしてもこうした考えにとられてしまう。すなわち、自分の恵まれない状況は、少なくとも部分的には自ら招いたものであり、出世するための才能とやる気を十分に発揮できなかった結果なのだ、と。人びとの出世を可能にし、称賛する社会では、出世できない者は厳しい判決を宣告されるのである。

(中略)

先に述べた二つの社会はまったくの仮想事例ではない。二つの社会を悩ませる所得の不平等は、こんにちのアメリカで広く見られるものだ。こうした不平等が擁護される場合——そもそも擁護されるとすればだが——何らかの能力主義的な根拠が持ち出されることが多い。金持ちは裕福な親のもとに生まれたのだから金持ちであるべきだ、などと言う者はいないのである。不平等を批判する人びとは、たとえば相続税廃止論者は暗黙のうちに世襲特権を認めているとして、不平を訴えるかもしれない。だが、世襲特権を無条件に擁護したり、キャリアは才能に基づくべきだという原則に異議を唱えたりする者はいない。

仕事、教育、公職などを手にする権利をめぐる議論の大半は、機会の平等を前提にスタートする。われわれの見解の相違は、その原則そのものではなく、それを実現するには何が必要かに関わっている。たとえば、雇用や大学入試におけるアファーマティヴ・アクション\*<sup>1</sup>を批判する人びとは、そうした政策は能力以外の要素で志願者を判定するのだから、機会の平等と矛盾すると主張する。これに対して、アファーマティヴ・アクションを擁護する人びとは、そうした政策が必要なのは、差別や不利益を被ってきた集団のメンバーに対して機会の平等を実現するためだと反論する。

少なくとも原則のレベルにおいて、また政治的レトリックにおいて、能力主義は勝利を収めてきた。世界中の民主主義国で、中道左派\*<sup>2</sup>と中道右派\*<sup>3</sup>の政治

家はこう主張する。自分たちの政策は、人種や民族、性別や階級にかかわらず、あらゆる市民が同じ条件で競い合い、努力と才能の許すかぎり出世できるようにするものである、と。人びとが能力主義について不満を訴える場合、理念についてではなく、理念が守られないことについての不満であるのが普通だ。すなわち、裕福で権力を持つ人びとは、自分たちの特権を永続させるために制度を不正に操作してきたとか、知的職業階級の人びとは自分たちの優位性を子供に引き継ぐ方法を考え出し、能力主義社会を世襲の貴族社会へ変えてしまったとか、大学は能力に基づいて学生を選抜すると主張しながら、裕福でコネのある人びとの子弟に下駄を履かせている、などといった具合だ。こうした不満によれば、能力主義は神話であり、いまだ果たされていない遠い約束なのだ。

こうした不満は、なるほどもっともである。だが、問題がもっと根の深いものだとしたらどうだろう？ 能力主義の真の問題はそれを実現できないことではなく、その理想に欠陥があることだとしたら？ 出世のレトリックがもはや人びとを勇気づけるものではないとしたら？——単に社会の流動性が失われてしまったからというだけでなく、もっと根本的に、人びとが競争の激しい能力主義社会で成功の階段をよじ登ろうとするのを助けることは、市民権や自由をめぐる貧弱な概念を反映した空虚な政治的プロジェクトにすぎないために。

このさらに大きな問題を探求するには、道徳的・政治的プロジェクトとしての能力主義に対する二つの異論を検討する必要がある。一つは正義に関わるもの、もう一つは成功と失敗に対する態度に関わるものだ。一つ目の異論は、能力主義が十分に実現しさえすれば、つまり仕事や賃金が努力と才能をきちんと反映すれば、正義にかなう社会になるという考え方に疑問を投げかける。二つ目の異論は、能力主義社会が公正であっても、それは善い社会ではないのではないかと懸念する。こうした社会は勝者のあいだにおごりと不安を、敗者のあいだに屈辱と怒りを生み出すだろう——こうした態度は、人類の繁栄と対立し、共通善を腐食する。

能力主義に批判的な哲学者は、主として一つ目の異論に力を注ぐ。この先で検討する理由により、現代の哲学者のほとんどは、社会は人びとが値するものに基づいて仕事や賃金を割り振るべきだという考えを拒否する。この点で、(1)哲学者は一般的な意見を特徴づける道徳的直観と対立する。正しいのは誰か——哲学者か一般市民か——を解き明かそうとすることは、やるだけの価値がある。

一つ目の異論は正義に関するものであり、哲学の世界ではよりおなじみのもの



だ。いっぽう、二つ目の異論はおごりと屈辱に関わっており、現在の政治情勢を理解するにはこちらのほうが重要かもしれない。能力主義的エリートに対するポピュリストの抗議は、公正さだけでなく社会的評価にも関係する。こうした抗議を理解するには、それを駆り立てる不満や怒りを見極め、評価しなければならない。そうした不満や怒りは正当だろうか、それとも見当違いだろうか？ それらが正当なものだとすれば、対処するにはどうすればいいだろうか？

ある日、われわれは、成功へのあらゆる不公正な障害をどうにか取り除いたものと想像してみよう。その結果、恵まれない環境で育った人を含め、誰もが特権階級の子弟と同じ土俵で競い合えるようになった。われわれは、原則として宣言していることを実際に達成したものと想像してみよう。つまり、すべての市民は平等な機会を手にするべきであり、才能と努力の許すかぎり出世できるという原則だ。

もちろん、こうした社会を実現するのはきわめて難しい。差別が完全に克服されることはないだろう。家族制度のせいで、すべての人に平等なチャンスを与えるというプロジェクトは困難なものとなる。裕福な親が我が子にもたらす恩恵を埋め合わせるのは容易ではない。私が主として念頭に置いているのは、相続財産の話ではない。遺産税をしっかりかければ、その問題には対処できる。私が考えているのは、誠実で裕福な親が我が子を手助けする日常的なあり方のことだ。最も包括的な最高の教育制度でさえ、恵まれない境遇にいる生徒を、あふれんばかりの思いやり、資源、コネを与えてくれる家庭の子供と同じ条件で競えるようにするのは難しい。

しかし、これが実現できるものと仮定しよう。学校で、職場で、人生で、成功のために競い合う平等な機会をすべての子供に与えるという約束を果たせるものと考えてみよう。その場合、正義にかなう社会が成立するのだろうか？

つい、こう言いたくなる。「もちろんだとも。これこそ、まさにアメリカン・ドリームじゃないか——流動性の高い開かれた社会、つまり、農場労働者の子供だろうと、無一文の移民の子供だろうと、CEOに出世できる社会をつくるんだ」。こうした夢がアメリカ人にとって特別の魅力を持ちつづけるかぎり、それはまた世界中の民主主義社会において共感を呼ぶことになる。

完全に流動的な社会は、二つの理由から、人を奮い立たせる理想となる。第一に、それは自由についてある種の考え方を表している。つまり、自分の運命を決

めるのは、生まれた環境ではなく、自分自身であるべきだという考え方だ。第二に、自分が獲得するものは、自分が値するものであってほしいという願いを示している。自らの選択と才能に基づいて自由に出世できるとすれば、成功を収める者はそれを享受するに値すると言っても、公正に思える。

だが、その強い魅力にもかかわらず、能力主義が完全に実現しさえすれば、その社会は正義にかなうという主張はいささか疑わしい。まず第一に、能力主義の理想にとって重要なのは流動性であり、平等ではないことに注意すべきである。金持ちと貧乏人のあいだの大きな格差が悪いとは言っていないのだ。金持ちの子供と貧乏人の子供は、時を経るにつれ、各人の能力に基づいて立場を入れ替えることが可能でなければ——つまり、努力と才能の帰結として出世したり没落したりしなければ——おかしいと主張しているにすぎない。誰であれ、偏見や特権のせいで、底辺に留め置かれたり頂点に祭り上げられたりすべきではないのである。

能力主義社会にとって重要なのは、成功のはしごを上る平等な機会を誰もが手にしていることだ。はしごの踏み板の間隔がどれくらいであるべきかについては、何も言わない。能力主義の理想は不平等の解決ではない。不平等の正当化なのだ。

このこと自体は、能力主義に反対する議論ではない。だが、それはある疑問を提起する。能力主義的な競争の結果として生じる不平等は、正当化されるだろうか？ 能力主義の擁護者は「イエス」と答える。全員が平等な条件で競い合うかぎり、その結果は正義にかなっているというのだ。公正な競争であっても勝者と敗者はいる。重要なのは、すべての人が同一のスタート地点からレースを始めること、つまり、トレーニング、指導、栄養状態、その他もろもろの要素を平等に手にしてきたということだ。もしそうであれば、レースの勝者は賞を受けるに値する。ある人がほかの人より速く走るという事実、正義にもとる部分は何もないのである。

この議論に説得力があるかどうかは、才能の道徳的地位にかかっている。最近の公的言説において非常に目につく出世のレトリックを思い起こしてみよう。政治家たちはこんなふうに公言する。出自がどんなに卑しくても、われわれは誰もが、才能と努力の許すかぎり出世できなければならない、と。だが、そもそも才能と努力の許すかぎりであるのはなぜだろうか？ 自分の才能が自分の運命を決めるのであり、人は自分の才能がもたらす褒賞に値するのだと仮定するのはなぜだろうか？

この仮定を疑うのには二つの理由がある。第一に、私があればこの才能を持っているのは、私の手柄ではなく、幸運かどうかの問題であり、私は運から生じる恩恵（あるいは重荷）を受けるに値するわけではない。能力主義者は、私が裕福な家庭に生まれたおかげで浴する恩恵に値しないことは認める。だとすれば、ほかの形の幸運——たとえば特定の才能を持っていること——はどうして違うのだろうか？ 私が州の宝くじで100万ドルを当てたとすれば、自分の幸運に大喜びすることだろう。だが、その棚ぼたの大金を自分で稼いだとか、宝くじに当たったのは自分の能力のおかげなどと主張すれば、何とも愚かしいはずだ。同様に、宝くじを買ってはズレたとしても、がっかりはするだろうが、自分が値するものを受け取れなかったと不平を言うことはできない。

第二に、自分がたまたま持っている才能を高く評価してくれる社会に暮らしていることも、自分の手柄だとは言えない。これもまた運がいいかどうかの問題なのだ。レブロン・ジェームズは、絶大な人気を誇るスポーツであるバスケットボールをプレーし、数千万ドルを稼いだ。並外れた運動能力に恵まれているだけでなく、そうした能力を高く評価し、報酬を与える社会に生きている点で、レブロンは幸運だ。レブロンが、バスケットボール選手ではなくフレスコ画家が引っ張りだこだったルネサンス時代のフィレンツェではなく、彼が卓越した力を発揮できるその競技が大人気の現代に生きていることは、彼の手柄ではない。

同じことは、われわれの社会がそれほど高く評価しない娯楽に秀でている人びとについても言える。アームレスリングの世界チャンピオンは、レブロンがバスケットボールに秀でているのと同様、アームレスリングが得意かもしれない。居酒屋の数人の常連客を除いて、彼が対戦相手の腕をテーブルに押さえつけるのを金を払って見物しようとする者はいない。だが、それは彼の責任ではない。

能力主義信仰の魅力の大半は、次のような考え方にある。すなわち、少なくとも適切な条件下では、われわれの成功は自分自身の手柄なのだという考え方だ。経済が、特権や偏見で汚染されていない公正な競争の場であるかぎり、われわれは自分の運命に責任を負っている。われわれは自身の能力に基づいて成功したり失敗したりする。われわれは自分が値するものを手に入れるのだ。

こうしたイメージは人に自由の感覚を与える。われわれは独立独行の行動主体であり、自分の運命の作者、宿命の主人となれることを示唆するためだ。それは道徳的に満足のいくものでもある。人びとに与えるべきものを与えるという古来

の正義概念に、経済が応じられることを示しているからだ。

だが、自分の才能は自分の手柄ではないと認めてしまえば、この独立独行というイメージを維持するのは難しくなる。偏見や特権を克服しさえすれば正義にかなう社会が到来するという能力主義的信念は、疑問にさらされる。自分の才能が、遺伝的な運あるいは神によって授けられた贈り物だとすれば、われわれは自分の才能がもたらす恩恵に値するという想定は誤りであり、うぬぼれなのである。

マイケル・サンデル著、鬼澤忍訳『実力も運のうち 能力主義は正義か?』

(早川書房、2021 年) による。一部改変。

## 注

- \*1 アファーマティヴ・アクション……社会的弱者への優先的な配慮を通じて、平等を実現しようとする取り組み。
- \*2 中道左派……極端でない革新的な思想を持つグループ。
- \*3 中道右派……極端でない保守的な思想を持つグループ。

## 課題文②

そもそも所得格差の拡大は、問題なのだろうか。人々は本当に所得格差拡大を問題だと思っているのだろうか。格差拡大を問題視する人がいる一方で、日本が過度の平等主義にあったと考えている人は、格差拡大を歓迎しているかもしれない。

筆者は「所得格差の拡大は問題であると思うか否か」を直接アンケート調査で人々に質問してみた。その結果によれば、所得格差拡大に肯定的なのは、高学歴者、高所得者、高資産保有者であり、所得格差拡大に否定的なのは、貧困者・ホームレスの増加を実感している人と、危険回避的な人である。

所得格差の拡大がどんなものでも問題だというわけではない。格差拡大の理由によっては、格差拡大に賛成する人も多くなる。内閣府の「国民生活選好度調査」によれば「個人の選択や努力の違いによる所得等の格差は当然である」という考

え方を肯定する人は、日本人の7割であり、年収が高い人ほどその割合が高い。一方で、「個人の持って生まれた能力が異なるために、所得等の格差は当然である」という考え方を肯定する人は約5割であり、年齢が高いほど肯定的である。また、能力主義的な人事・賃金制度についても4割の人が肯定的であるという。つまり、努力や能力による所得格差を認める人は結構多い。筆者自身が行ったアンケート調査でも、同じような結果が出ていた。

ところで、所得の不平等度が高いことを不幸なことだと考えるのは、万国共通なのだろうか。ハーバード大学のアレジーナ教授らは、ヨーロッパ（EU諸国）とアメリカについて、膨大なデータを用いて比較研究を行った。彼らの研究によれば、(7)ヨーロッパでは不平等度が高まると人々は幸福感を感じなくなるのに対して、アメリカ人は不平等度が高まっても幸福感が影響を受けないという。

この違いを説明する二つの仮説がある。第一の仮説は、「ヨーロッパの人々は平等を好むがアメリカ人はそうでない」という「平等感の違い仮説」と呼べるものだ。危険に対する態度の差もその一つである。第二の仮説は、「アメリカでは、所得階級間の移動率が高いので、現在貧しいことは必ずしも将来の貧しさを意味しない。そのため、所得格差が高いことそれ自体は不幸に結びつかない」という「所得階層間移動仮説」と呼べるものである。

彼らは、左派か右派かというイデオロギー別、所得階層別に、不平等と幸福感の関係を分析することで、これらの仮説を確かめた。左派と右派というイデオロギーによって不平等が幸福に与える影響が異なり、左派と右派の比率がアメリカとヨーロッパで違うのであれば、第一の「平等感の違い仮説」が成り立つ。一方、ヨーロッパの低所得の人々が不平等を特に気にしているのであれば、第二の「所得階層間移動仮説」が成り立つ。

結果は、「所得階層間移動仮説」と整合的であった。アメリカ人で不平等を気にしているのは、貧しい人々ではなく、豊かで左派の人々である。一方、ヨーロッパでは、左派だけでなく、貧しい人々も不平等は不幸であると考えている。左派の人々が平等を重視するのは同じであるが、貧しい人々が不平等を不幸だと感じるのは、ヨーロッパに限られているのである。ヨーロッパの方が、アメリカに比べて、所得階層間の移動率が低いことが、ヨーロッパで所得の不平等が深刻な問題だと考えられる理由なのである。

日本は、アメリカとヨーロッパのどちらに近いのであろうか。日本では、実際

には所得格差がそれほど拡大していないにもかかわらず、所得格差の拡大について大きな関心がもたれている。また、「所得格差の拡大は問題だ」と考える人は、所得や資産が低い人々に多い。これは、ヨーロッパの人々の不平等に対する考え方に近い。つまり、(エ)所得階層間の移動可能性が低い社会になっていることを反映しているのではないだろうか。仮に、階層間の移動の可能性が高ければ、現在所得が低い人であっても、努力すれば高所得者になることが可能であるので、努力の結果格差が生じることを容認するはずである。

大竹文雄『経済学的思考のセンス』（中公新書、2006年）による。一部改変。

### 課題文③

当事者になるか否かの分かれ目に、「たまたま」という本人の選択に帰結できないような要素が少なからずあります。上段に立った者、下段に転げ落ちた者。勝ち組になることも、負け組になることも、この「たまたま」と無縁ではありません。負けたのも本人のせいばかりとはいえません。ですから、勝ったからといって必要以上におごることもないですし、負けたからといってそんなに落ち込むこともありません。勝ったこと、負けたことをどう位置づけるかは、これからの生き方によるからです。評価とは、これまでやってきたことに対して下されるものですから、その意味で後ろ向きの思考です。その後ろ向きの思考を今後どう生かしていくか、あるいは変えていくかは、本人の前向きの思考によります。

もっとも、負けたことなど気にすることはないなどといっても、実際にはそうはいかないでしょう。何年もその日の勝負のために準備してきた者にとって、負けたという事実はそれなりに重いものです。しかし、結果というものは一瞬です。何事にも結果があって、その結果は良いときもあれば悪いときもあります。一瞬の結果にどれくらいすがっていくか。それは本人のこれからの生き方次第です。人生はつながっているのです、一つの結果がでてもまた次の結果があります。ですから、一つの結果ばかりに気をとられていても、次には進んでいきません。あるときは悪い結果であっても、いくつもの結果を受け止めていくうちに、実はその

ときの結果が悪いとばかりもいえなかった、ということだってでてくるかもしれません。時には立ち止まって少し休んだり、これまでを振り返ってみたりすることも大切です。ここで大事なのは、いまの結果を最終的にどう位置づけるかは、これからの生き方によりけりだということです。

貧困に陥るリスクは特別な者だけにあるのではなく、われわれすべての者が抱えています。いくらヒルズ族といわれ、勝ち組と賞賛されようが、貧困は彼・彼女らにとっても、他人ごとではありません。この視点こそが貧困を語る際に重要なのです。なぜなら、どうしてヒルズ族になれたかには、多くの場合、「たまたま」の要素が入っていて、貧困にいたっても、いわれなき要素と無縁でないからです。

しかし、「たまたま」の要素を指摘することは、一生懸命努力しなくても結果は同じだ、といっているのではありません。むしろ、その逆です。一生懸命努力することは素敵なことだし、一生懸命生きることにもかっこ悪いことではないのです。ただ、人生そのときどきに出てくる結果を、「すべて自分のせいだ」と必要以上に「重く」とらえることはないということです。いまの結果を、これからどのように生かし変えていくかは、本人次第なのですから。

ここで「たまたま」という不確実な要素を指摘するのは、短絡的な自己責任論に対する警告でもあります。一つの結果を自己責任のみに帰結させることができないのは、その結果を導いたのが自分のせいだけでない「たまたま」の要素がそこに介入するためです。

例えば、不況の時期に就職活動があたった場合、うまく職につけない状況を怠け者だからとか、積極性が足りないからだというだけでは済まされない面が少なからずあります。社会への最初の扉を開ける時期が、どのような状況にあるかによって、彼・彼女ら自身のその後の職歴にも違いがでてきます。あまるほどの企業からの採用通知を受けた者もいるでしょうし、何社も申し込んでやっとの思いで手に入れた採用通知にほっとすると同時に、実際その仕事についても第一希望への未練が残る人だっているでしょう。就職市場が厳しい時期に仕事についた者の離職率が高いことはすでに指摘されています。このように、就職活動一つをとっても、たまたま時期が悪かったというバッド・ラックが、単なる一時的な運の悪さだけでなく、その後の職業経歴にも影響を及ぼすことが少なくありません。どんな時代に生まれ、どんな状況の市場に参入するか、といった「たまたま」の要素が、個人の人生に影響を及ぼします。自己責任だけで個人の選択を処理でき

ないメカニズムが存在するわけです。

ただその一方で、個人の責任を無視してもよいというわけではありません。大人になるということは、自分でやったことに対して責任をとることが期待されるということでもあります。ある選択をしたことは、周りの状況がどうであれ、最終的には当人が下した結果なのですから、個人の意志がまったく介入しないということはありません。どうしてその結果にいたったのか。どうしてその選択肢を選んだのか。このような選択過程には、たまたまの要素が入る半面、行為の当事者としての意志もからむのです。たまたまの要素にどれだけ抵抗できるか、あるいは甘んじてしまうかは、本人の「ちから」によります。たまたまの要素への抵抗力や対応力は、どの程度の体力や資力・財力をもっているか、どの程度の支援ネットワークをもっているかというような「蓄え」の量によって異なってきます。

多様でかつ充実した蓄えをもつ者が、たまたまのリスクへの対応力が高い傾向にあります。それは、天災という無差別に降りかかってくるリスクも、この「蓄え」をどの程度もっているかによって違ってきます。例えば、地震があったとしても、高級住宅街では家そのものが頑丈に設計されていて、そうやすやすと倒壊しません。一方、家が倒れてその下敷きになり、多くの被災者をだすのは、比較的貧しい地域でしょう。災害リスクはだれにも降りかかるものですが、そのリスクが実際にどの程度のダメージをもたらすかは、人によって、家族によって異なるのです。それが格差、不平等となって社会に顕在化していきます。

白波瀬佐和子『生き方の不平等——お互いさまの社会に向けて』

（岩波新書、2010年）による。一部改変。









